



小石

大正から439号を北上する。江師トンネルを抜けると、すぐに小石トンネルがあり、この小石トンネルの手前、つまり山の南側の橋原川沿いに集落が形成されている。江師トンネルに入らず、右折して旧道を行くのも趣がある。

小石は、昔からその名の通り小さな村で、戦国期の記録には、江志（師）村の一部とある。また、江戸時代中期の記録に「家数四」、後期の記録には「家数五」とあり、常に小規模の集落であったことがわかる。山と川の間に平地が少なく、小石の人々は、対岸の江師で耕作したり、山の中腹に畑を造った。山の畑は、当然のように獣害に遭う。そこで小石の人々はその対策として、これら山の畑をぐるりと囲う「猪（しし）囲い」を作ったそう。作られたのは江戸時代で「その作業をするクロサクという人の様子が、遊び歌というか、数え歌のようなものとして残っています」と地区の歴史に詳しい方に聞いた。「江師の小石のクロサクは昼も夜も頭巾被り通した」というもので、残念ながら、どのような節であったのかははつきりとはわからない。この「猪（しし）囲い」は今も残っているらしい。

さて、戦後間もない頃の話。ある人が江師に家を建てた。建築時、大きな木材を引き上げるのに、当時としてはかなり立派な麻のロープが使われた。これは頑丈そうだ！ということで、用が済んだ時に小石の人がもらい受けた。その頃、年に一度、江師と小石の運動会が行われていて、このロープで「綱引きをやる」ということになったのだそうだ。この綱引きは、現在の江師橋の下で行われ、たいそう盛り上がりたらしい。今から70年

以上前のことなので、その麻のロープも朽ちてしまったであろうと思いきや、なんと「ほぼ完品」として、地区の方が保管しておられるのである。これはもう立派な文化財といえる。

さて、橋の下川原で綱引きが行われたと書いたが、当時の川原は現在の様子とは異なり、石が細かく、またその石も上流から流れてきた石灰岩が多く、地区の方の表現を借りると「足に優しく、色も白かった」という。また「子どもの頃、真っ白な石を川に投げ入れて、誰が一番それを潜って見つけるかという遊びをよくやった」と話してくれた。

ところで、小石の産土神は、江師から大橋を渡ってきた突き当たりを少し登ったところにある金比羅神社であるが、その登り口には、七体の石仏が祀られている茶室跡がある。この場所にまつわる言い伝えがおもしろい。その昔、田野々の熊野様がここを通った時に、対岸に見える日当たりの良い江師を眺めながら「江師は恋しい」と言ったとか。それ以降、熊野様がひと休みしたこの地を「恋し小石」と呼ぶようになったというのである。そんな可愛らしい由来が伝わっている小石も恋しい。



70年以上前の綱引に使われた麻のロープ。

【お詫び】 11・12月号で「大正中津川」のふりがなを「たいしょうなかつがわ」と表記しておりましたが、正しくは「たいしょうなかつかわ」です。訂正してお詫びいたします。

町のうごき

(11月30日)	人口	前月比	出生	死亡	転入	転出			
男	7,568	-1	男	5	14	13	5	窪川地域	11,226人
女	8,232	-17	女	4	15	12	18	大正地域	2,190人
計	15,800	-18	計	9	29	25	23	十和地域	2,384人
世帯数	8,145	-6	(11月中の届出)						

四万十町通信

2023.1月号
Vol.202 (毎月10日発行)

●発行／四万十町企画課 ●印刷／窪川印刷

〒786-8501 高知県高岡郡四万十町琴平町16-17

☎ (0880) 22-3124

FAX (0880) 22-3123

UD FONT
by MORISAWA

本文など内容の一部に見やすく読みまちがえにくい
ユニバーサルデザインフォントを採用しています。